中学生の和歌創作学習に関する実践的研究

―百人一首にかかわる返歌、類想歌創作の試み―

植山　俊宏

（京都教育大学）

Practical study waka poetry original learning of the junior high student

－Answering waka poetry about traditional Japanese playing card, trial of similar waka poetry

TOSHIHIRO Ueyama

2017 年 11 月 30 日受理

抄録：理解一辺倒の和歌学習が不活性な理由として、教育内容と学習内容の上下関係、垂直構造が指摘できる。この関係、構造を破る方法として、学習者の位置を理解者から創作者へと転換させ、主体的、意欲的に取り組ませる百人一首を活用した返歌、類想歌創作の実践を構想し、実践した。その実践結果の考察により全員創作、一定水準の創作レベルなどの大きな成果を得たと判断できた。

キーワード：和歌創作、上下関係、垂直構造、百人一首、返歌、類想歌、グループ創作、山部赤人、藤原家隆

Ⅰ．古典教育の問題点と解決の方途―閉鎖的現状を招いた要因と解決の方向性―

平成 20 年告示学習指導要領において小学校から高等学校に至るまでの一貫した古典の重視が唱えられた。高等学校では古典教材が大きな柱の一つであるように、これまでも古典教育には一定の意義が認められ、多くの授業時間が割かれてきた。しかし、中学校の古典教育との接続性は疑問視されてきたし、小学校に至っては、軽視といっていい状況にあった。小学校から高等学校までの 12 年間の連続性の確保、教育の安定した成果をねらった改革であった。従来の枠組みである、古文、漢文を併せて古典ととらえ、学習の強化が図られた。「伝統的な言語文化」というジャンルを設立し、積極的な取組を指示した。だが、それから十年を経ようとしているが、一定の成果を挙げつつも、まだまだ多くの問題も散見され、また、新たな問題も生じている。

1．先行研究に見る古典教育の問題点と解決の方向性

内藤一志(2009)は、「伝統的な言語文化」が唱えられた平成 20 年度学習指導要領告示直後の論考で、これまでの「古典教育実践研究の蓄積から」として、以下の 2 点を問題点としている。主要な課題を取り出し、検討する。

(1)「言語抵抗、内容的な抵抗」

まず、「言語抵抗、内容的な抵抗、つまり学習者にとって知らないことが多すぎて、学習意欲を失いがちであること。」を挙げる。古典は、現在総体的な言語として用いられていないから「古典」なのであり、当然、多くの「抵抗」となる要因を含め持っている。この「抵抗」が、学習意欲に直結すると、克服の場合は、意欲は増大するが、阻害の場合は、意欲は消失に至るといっていい。この「抵抗」を克服させなければ、主体的な古典学習は成立しないことになる。この克服のための合理的な手段、そしてエネルギーの確保が重要になる。

(2)「日常生活から」の「乖離」

ついで、「日常生活から乖離し、学習目的をもちにくいこと。かろうじて、受験対応が学習目的化していること。」を掲げる。これも自然な立論のように思われるが、「日常生活」における「古典」のあり方を注視してみると、即断はやや危険である。もちろん、昭和戦後以降の日本語のありようを見るとこのように判断することも可能であろう。昭和戦前期以前の小説に代表される文学作品には、文語定型詩や古典の翻案など一定の濃度で古典が反映されていた。藤村の『若菜集』、敦の「山月記」、芥川の一連の古典風作品などが思い浮かんでくる。そうしてみると、「日常生活」と古典が結びついていたとすることができる。この動きが戦後期に入って急速に衰えたことは指摘できるが、一方的に衰退したということにはならない。大和和紀の「あさきゆめみし」(1979～1993)

に代表される古典の漫画化は大きなブームとなったし、高畑勲監督の映画「かぐや姫の物語」(2013 公開)が話題となったことも記憶に新しい。簡単に「日常生活から乖離し」たという判断は難しいということになる。ただ、文字メディアが絵画・映像メディアに取って代わっている点は、古典言語の支持の低迷化という指摘につながる。従来の理解学習を活性化するためにメディアを複合させた適切な教材化、教材的使用が必要であろう。

(3)「表現活動の導入―音声表現―」

内藤は、「高橋俊三を先導とする群読の導入は、古典の授業に変革をもたらした。群読という表現行為を目的化し、同時に従来の目的的活動であった口語訳や解釈、すなわち理解行為を必然化させ、受け身中心の古典の授業を替える契機をもたらした。中学に端を発し、高等学校、小学校へと波及した。」としている。「群読」についてはここでは検討しない。重要なことは、これまで学習者の個別の学習が集団の学習となったことである。それも場面性、同時性が重要であり、協働の体制を作り、ライブでパフォーマンスに集中する学習は、古典学習に新しい緊張感をもたらした。古典学習とライブの結びつきに注目する必要がある。

(4)「表現活動の導入―文章表現―」

「橋本治『桃尻語訳枕草子』(河出書房新社、1987-1995)に倣って当世風の言語によって古典の口語訳をする実践が 1990 年代に多く見られた。口語訳自体が硬直化した表現となって、古典と学習者の距離をさらに拡大していたのだが、文体の変更によってその距離を縮める効果があった」とする。この指摘を待つまでもなく、1980 年代以前より、「枕草子」の現代語による文章表現の実践は数多く行われており、現代においては、ほぼ定番的な実践となっている。「春はあけぼの。※以下、学習者の文章表現が続く」という形式である。この「桃尻語訳」はさておき、「枕草子」の一定の表現を借りて、冒頭に掲げてから、学習者の現代語による文章表現が続くという方法は、古典と現代語の接続を見事に具体化したものである。古典表現をそのまま用いることのおもしろさは、文語調のリズムを活用しつつ、現代語による自由な表現も保障するという大きな学習成果をもたらした。この古典表現と現代語表現との混合による文章表現の実践は広く行われており、学習意欲の喚起にもつながっている。

(5)「調べ学習」

京都という地域性を鑑みると、古典学習には圧倒的なアドバンテージを持っているといってよい。伝統的な神社仏閣はもちろんのこと、地名、橋の名称に至るまで古典と現代とを結びつけやすい。京都という地においては「調べ学習」は大きな効果が期待できる。八幡市の中学校古典教育と「徒然草」第五十二段との関係が著名だが、それ以外の場所も百人一首の作品の舞台となっている。例えば、喜撰法師の「わが庵は都のたつみしかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」や小式部内侍の「大江山生野の道の遠ければまだふみもみず天橋立」、貞信公の「小倉山峰のもみぢばこころあらば今ひとたびのみゆき待たなむ」などに舞台と実景との密接な関係が見出せる。これらは、ポスター作成やプレゼンテーションなどにも活用され、大きな成果を挙げている。だが、作品の舞台を知ったから古典の理解が深まるというのは早計であろう。古典表現の理解には別の方策が必要となる。また、古典作品の舞台に恵まれない地域はこの方法を活用する可能性は皆無といってよく、汎用性のある学習方法とはいいがたい。従来の理解学習の活性化、深化を図る目的で複合的な活用方法を案出していく必要があるといえる。

(6)「リライト作品の導入―原文のみが教材か―」

内藤は、「サブカルチャーの代表格であるマンガを用いて、メインカルチャーである古典を理解しようとするのは、授業においてはある意味禁じ手であったといえる。古文の場合、大和和紀『あさきゆめみし』によって状況は一変した。マンガは親しみや内容理解の容易さにおいて学習者に歓迎され、最大課題の言語抵抗を軽減させる有効打であった。」とする。古典学習へのマンガメディアの積極的な導入が活性化をもたらしたことは論を俟たない。特に最大難関の「源氏物語」への理解の入口を示したことは、大いに学習者を奮起させたし、その姿に教師も勇気づけられた。だが、それが「学習抵抗を軽減させ」たとするのは、やや行き過ぎだと思われる。状況を改善したのは、学習意欲の方であり、「言語抵抗」が改善されたわけではない。そうすると、「リライト作品」が学習成果に結びつくという判断には慎重である必要がある。マンガなどの絵画メディア、映像メディアの古典学習への活用は別の視点を取り込む必要があるだろう。

(7) 中学校古典教育の問題点

内藤(2015)は、小学校、中学校、高等学校の古典教育の特徴と変化について、「小学校では、子どもたちの言語生活の中に継承されている物事、行為に視点を向けた実践が行われている。一方で、従来から古典が教育内容

として設定されていた中学・高校では教育素材を古典にとどめる傾向がまだ根強く、古典と近現代をつなぐ教材開発や授業開発が課題である。」とする。このことは、中学校古典教育において近現代につながる視点が弱く、いわゆる古典を絶対視する上限関係、垂直構造から脱しきれていないことの指摘としてみることができる。

2. 古典教育の問題点の再検討

古典学習のさまざまな阻害要因を見てみると、古典教育として指導・学習を一体化させて実践していくためには、再検討が必要なことが見てとれる。現代的な手法・メディアの活用は低迷からの一定の浮揚をもたらしたが、それは安定したものではないし、学習成果を高めるといいきれるものでもない。ここでは、古典作品(教材）と学習者の位置関係、古典の遊戯化、”古典”創作の 3 点から考察する。

（1）上下関係、垂直構造による呪縛

古典学習の理解の段階では、「解」が明確である。それはしばしばその作品の背景となっている知識、及び当時の文法則によって規定される。平安朝の大部分の古典作品は当時の宮中の制度やルールにより解釈されるし、また当時用いられていた言語（古語）の文法によりほぼ決定づけられる。ここに古典文学研究の成果が大きく反映される。そうなると、古典の理解はそれまでの不明瞭だった意味の霧が晴れて、当時の世界を把握することが最重要視されることになる。古典学習が古典文法、古典知識の習得に傾斜するのも自然なことである。だが、それは古典の権威化、絶対視に結び付き、歴然とした上下関係、垂直構造の下部に学習者を位置づけ、固定することになる。この上下関係、垂直構造から脱却するには、古典作品の相対化しか方法はない。だが、それは容易なことでない。この問題を解決する方途として、古典作品の表現の優劣をとらえる試みが必要となる。

（2）古典の遊戯化

2008 年に末次由紀のマンガ「ちはやふる」がマンガ雑誌に掲載され始め、徐々に人気を獲得し、2016 年に映画化されるに至った。この映画は観客動員数、受賞数などさまざまに高く評価され、全国的に競技カルタのブームを巻き起こした。競技カルタは、小倉百人一首（以下、百人一首とする）のカルタをルールに則って獲得し合う競技であり、いわば古典の遊戯化といえる。全国的な競技大会も話題になるが、一般的には中学校の正月の行事として行われることが多い。最近では小学校でも取り組まれている。古典への親しみという点では抜群の人気を得ているということができる。朗詠者が上の句を読み上げ、競技者が下の句のみが書かれた字札を取り合うのが原則であり、少なくとも百人一首の和歌を暗記していなければ、札をとることは難しい。この古典語の和歌を暗記して、その能力を字札の獲得能力に反映させるという知的で、スポーティな面が高い人気につながっていると考えられる。だが、ここには和歌の解釈能力はほとんど関わってこない。競技カルタの優秀さと和歌の理解力は乖離しているのである。競技カルタが本格的な学習の動機づけにつながらないのはこの理由による。

（3）古典創作の低迷―俳句創作、短歌創作の低迷

この 30 年の間に俳句の創作学習はかなりに盛んになってきた。特に小学校において、俳句創作を行ったことのない小学生はまず見られないようになった。中学校、高等学校へと進むにつれて、その割合は減少するが、一般的には多くの実践が行われているといえる。これは、「佛教大学小学生俳句大賞」、「龍谷大学青春俳句大賞」（中高校生対象）などの俳句コンクールが隆盛を極めていることがその証左となっている。俳句ほどではないが、短歌も一定の創作学習が行われており、いわゆる韻文創作に親しむ古典学習は支持を得ているといってよい。しかし、問題点は、この学校教育段階ではない。俳句結社、短歌結社、新聞の俳壇・歌壇への投稿を見ると、高齢化が進み、創作者の人口は減少しつつある。このことは、学校教育として「古典に親しませる」ことをねらっているにもかかわらず、結果は「親しめない」という一つの結果を示していることになる。学校教育段階で行われる俳句創作、短歌創作は、古語の使用を原則とはせず、むしろ口語俳句、口語短歌を推奨する傾向にある。そうすると、従来の方法では、これらの韻文創作では古典教育の振興には十分寄与できないという結論に至ることになる。古典の定型詩のもつ五七調（ありは七五調）の韻律（リズム）は、創作の生命線であり、それは韻文の解釈を超えて快感をもたらしていることはしばしば指摘される。この韻律重視の創作方法を再考する必要があろう。

3. 先行実践の検討―和歌理解学習から随筆創作学習への道―

私立東山中学校高校の柴田昌平（2013）は、平成 20 年告示の学習指導要領を受け、「伝統的な言語文化に親

しみ、日本語のことばの特徴・良さをより理解するために、小学校・中学校・高等学校の各校種で、古文や漢文に関する指導の充実が求められている。これは、先人の生きざまを理解し、自らの「生きる力」を伸ばしていくことも望まれているととらえてよい。」として、「和歌などの古典を教材化する価値と配慮の再考」に取り組んだ。

（1）柴田実践の理論的基盤

柴田(2015)は、小学校・中学校・高等学校の教科書掲載和歌教材の調査を行い、『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』のいわゆる三大集に過度に傾斜している事実を指摘した。このことは従来から唱えられてきたことだが、歌数の面、歌集の面でも極めて乏しいという結論は、和歌学習の広がりの乏しさを改めて検証する結果となった。一方柴田は,京都教育大学学生 104 名を対象としたアンケート調査も行っている。内容は、中学校高校国語免許取得予定学生が百人一首、三夕の歌、近世和歌に対する認知度、和歌の学習歴等を調べるものであった。その結果、親しみやすい和歌は、「①対比構造や語彙面からの「わかりやすさ」「共感」」、「②ことばの響きや音読教材のとしての適性」、「③作歌背景・古典知識等から作者の心情や感覚に迫りやすい和歌」、「④作歌背景等から離れ、普遍的な心情を詠んだ和歌」という条件を備えたものという結論が得られた。

（2）柴田実践の概要

柴田は、『古今和歌集』「春の部上」42 首をすべて教材とする古典の授業を考案、実践した。糸井通浩の理論に基づき、和歌表現の「類比性」「独自性・対比性」を見いだし、類別していくという深化よりも拡充をねらったものである。この知的処理的な類別の学習活動をグループで行わせ、42 首すべてを分類し、特徴を見いださせ学習の成果としている。従来、歌数が多くても 10 首に満たない学習が一般的であったことを考えると、この実践の特徴と独自性が浮き彫りになってくるといえる。一定数の和歌の類別作業は、和歌の合理的な理解と言い換えることができる。学習者のこの実践に対する知的な満足度は非常に高く、和歌に対する「親しみ」は十分確保できたと認められる。また柴田は、この後、「成果物」として、学習した和歌の世界を素材にした「エッセイ創作」を行わせている。単元実践中の病気入院等のやむを得ない事情の学習者を除く全員が一定量、一定の質のエッセイを書くことができている。これは、和歌を合理的に理解し得た結果、そのエネルギーが適切に表現学習に転化されたことを示すと考えてよい。

（3）柴田実践が示唆するもの

柴田実践は、和歌学習に対する基礎的な調査研究を基盤としつつ、一定数の和歌の読み、理解学習から創作学習への展開を骨子とするものであった。この実践から受ける示唆は、和歌という古典学習からエッセイ創作という現代日本語の学習へのダイナミックな学習が可能であるということである。そうすると、古典学習の出口として、創作的な学習活動を位置づけることの意義が見出せることになる。これは、従来理解学習に閉じこもりがちであった古典学習に新たな道を開くことを示唆しているとみることができる。

Ⅱ．中学校における和歌創作学習―和歌の形式を活用する創作―

中学校段階は、古典学習の関心も嫌気も両方芽生える時期である。内藤の指摘するさまざまな阻害要因がすべて当てはまる時期であるし、また種々の古典授業の工夫も大きな成果を挙げる時期でもある。この微妙な時期に古典に親しませつつ、現代語の持つ自由度の高さも活かした実践を考案することに意味があると考える。具体的には、古典表現に拠りつつ、内容の自由度を上げた和歌創作学習の実践である。

1．京田辺市立田辺中学校 2 年生（252 名）に対する和歌創作授業

京田辺市立田辺中学校 2 年生（252 名）に和歌創作授業を実践した。市部ではあるが、近隣に田園地帯が広がる大規模中学校である。学習者に古典創作学習の経験はない。一時間のみの授業であり、前半をグループによる和歌創作、後半を百人一首の形式を利用した個人の和歌創作の学習活動とした。

（1）実践の計画と概要

①実践の時期　9 月 19 日火曜日　3 クラス（学校の時間割上、45 分授業で実施）

9 月 20 日水曜日　4 クラス（通常の 50 分授業）

②授業目標　全員和歌を創作できる

百人一首に対する返歌の意識で詠歌できる

和歌の伝承について体験的に実感・理解できる

④授業補助者

磯貝美智子・杉山瑞葵（京田辺市立田辺中学校教諭）・古志優佳（京都教育大学現職研修生・亀岡市立亀岡中学校教諭）・山根有貴（京都教育大学大学院生）

⑤授業計画案（展開案）

◆「めあて」の提示　　百人一首の返歌を詠もう

（導入）

○短歌一四〇〇年の伝統（天皇から庶民まで、あらゆる階層の人々の歌）

○字が読めない人も詠んだ＝万葉集の特色

○百人一首＝「歌かるた」によるゲーム・競技

○一三〇〇年も受けつがれてきた古典の和歌を自ら創作することで味わい、さらに伝えていく

○昔の和歌の形式の一つに、人に贈り（贈歌）、返事（返歌）をもらう贈答歌の形式があった

（展開⑴）―返歌創作―

○光孝天皇の歌に返歌を詠む（グループで）

・光孝天皇の年齢から考えて事実ではなく和歌の贈答遊戯と考えられる

・「若菜」の御礼の品を詠み込む条件を守る

・「若菜」の御礼の品を取りに行く歌を詠む

・事実である（事実を想定する）必要はない

○ミニホワイトボードに書いて披露する（解説する）

・初句の「君がため」はそのまま使用する＝初句指定

・どこかに御礼の品物を取りに行くこと（買うことはだめ）

・光孝天皇が喜ぶ品物を考える

展開⑵―類想歌創作（本歌取り風）―

○自分の風景を詠む（マイ風景歌）

・山部赤人の叙景歌を少し変えて、マイ風景歌にする

・「どこかに出かける」バージョン

・何かを見る（叙景）、何かをする（叙事＝できごと）

・「○○○○ゆうち出でてみれば」の表現指定

・「ゆ」は古典の雰囲気を出すために使用する

・「ゆ」の本来の意味から少しずれるが、行事等に出るという意味の使用を可とする

○自分の発見を詠む（マイ発見歌）

・藤原家隆の叙事歌に発想して、類想歌を詠む

・季節の風物だけではなく、中学校生活、部活動等も推奨する

⑥評価

○全員創作できたか

○百人一首に対する返歌の意識で詠歌できたか

○和歌の伝承について体験的に実感・理解できたか

（2）授業の成果

グループによる返歌創作は全グループ、個人による類想歌創作は全員成功した。だが、それをＡ３用紙にマーカーで清書して提出する率はやや落ちており、90%に止まった。

2. 中学生が創作した和歌の作品例(1)—グループによる返歌創作—

（1）学習活動の実際

最初に次の和歌（百人一首光孝天皇の歌）を掲示（模造紙に大きく書いたもの）し、簡単に歌意を確認した。この歌を選歌したのは、百人一首は相聞歌が多いが、多くは技巧が複雑なため、その中でも贈答的な形式をもち、作品構造と語彙が平易な作品であるという理由による。歌意の理解に困難を感じる学習者は皆無であった。しかし、最初の授業で女子生徒にこのような贈歌を詠みかけられたらどのように感じるかという発問に対しては、「キモい」、「重い」という反応が出ており、簡単にこの贈答の場面に入り込めるわけではないことが見て取れた。そのため、後続の授業では、これは虚構の場面を創造して、楽しむ和歌であるとして、学習者も虚構の場面を創出して楽しむように指示することとした。後続の授業ではまったく問題なく、返歌創作が行われた。

内容についての条件は設定せずに返歌のための贈答品は、現代の品物等でかまわないとした。なお、俳句創作、短歌創作で字数の墨守が学習の阻害要因となることが多いため、字余りに対する対策は考慮する必要がないことも伝えた。

君がため
春の野に出でて
若菜（わかな）つむ
わが衣手（ころもで）に
雪は降りつつ

創作時間は、約 10 分間とし、作品をミニホワイトボードに書いて、前で順次発表していった。

（2）Ｆ組の作品例（9 班すべて） 五行表記であったが、都合上一行表記に変えた。

ここでは、古典和歌の形式をふみつつ、コンテンツ（内容）を中学生の実感に近づける方法を採った。あくまで古典に親しむ態度を養うために、古典表現からの乖離の危険性を回避する方法を用いたということである。

①君がため秋の山に出でて栗ひろう我が手の平に針ささりつつ
②君がため秋の山に登りて松茸とるわが衣手に泥がつきつつ
③君がため夏の町に出でて酒つくるわが手の平にマメができつつ
④君がため夏の野に出でてカブトとるわが衣手は汗にぬれつつ
⑤君がため冬の海に出でてあわびとるわれはかぜひくも十個とりけり
⑥君がため夏の川に出でて蛍取るわが手の平に光もれつつ
⑦君がため秋のおがわでオオサンショウウオとるわが衣手に泥がつきつつ
⑧君がため冬の山に出でてみかんつむ我が衣手に雪は降りつつ
⑨君がため冬の海に出でてホタテ捕るわが鼻水はつららになりつつ

この作品例を見ると、詠い出しを同じくすることで返歌としての形式をふまえる意図が認められる。第二句も四季のいずれかを詠むことでこれも返歌の形式をふんだと見られる。また 9 班中 8 班が「出でて」という古語を用いており、ここに和歌のリズムに対する好感的な反応がうかがわれる。下の句の贈答品は、「栗」、「松茸」、「酒」、「カブト」、「あわび」、「蛍」、「オオサンショウウオ」、「みかん」、「ホタテ」となっており、贈答品と見なすことができる品々が並んでおり、ここに中学生独特の発想が見受けられる。「若菜」が食材であることから、食材・食品が 6 例あり、「カブト」、「蛍」、「オオサンショウウオ」という鑑賞物も 3 例示されている。詠むべき内容をさまざまに検討し、案出したことがうかがわれる。いうまでもなく、話し合いはかなり真剣に行われていた。

（3）百人一首への返歌の形式を用いた和歌創作の成果

これまでほとんど短歌すら創作したことのない中学生がこれほどの形式を守り、内容を工夫して案出した返歌

を創作したことは、まず原歌を真正面からに受けとめようとした意欲と古典作品への憧憬があったことを推測させる。特に古典和歌の形式を守る楽しさが和歌創作を豊かにしたことに結びついたとみることができる。また、内容的に無理に古典世界の事物に固執しないように指示したことで、かなり自由に現代的な贈答品を考え出すことにつながった。とはいえ、もっとも新鮮な事物が「オオサンショウウオ」であることから、原歌のもつ古典的な雰囲気を損なわないように留意したことがうかがわれる。今後の和歌創作に道を開く展望が得られたといえる。

3. 中学生が創作した和歌の作品例⑵—個人による百人一首の類想歌創作—

（1）個人による百人一首の類想歌創作の原歌と方法

←授業の後半は、和歌の個人創作とした。自由な発想では難しいので、ここも百人一首を活用することにした。百人一首の中でも平易な叙景歌を選び、その本歌取り的な和歌を詠むこととした。用いた和歌は次の二首である。

（2）使用した百人一首の作品二首

田子の浦ゆ
うち出でてみれば
白妙の
富士の高嶺に
雪は降りつつ

この和歌は、山部赤人の作であるが、作者はここではそれほど関係ないので触れておらず、また「田子の浦」の場所も富士山が見える場所であるという程度の確認のみとした。作歌の条件は、「～ゆうち出でてみれば……」として、後半に発見を表現するように指示した。またここでも虚構を奨励し、未経験の土地、外国、想像上の場所等もかまわないとした。この和歌の類想歌創作は、いわば”入口”の形を設定して、その後の展開を詠者の自由に任せる方式である。次の藤原家隆の和歌の類想歌創作より取り組みやすいと考えて設定した。また「～ゆ」の上代語は、沢瀉久孝が『万葉集講話』(1942 初刊、1986 文庫化再刊)で、田子の浦から海岸に出てみると解釈しているように、「～から」という意味で用いられている。そうすると、「～に出てみると」という解釈はそぐわないものとなる。だが、中学生にこの部分を上代語に忠実に表現させるとほぼ未達成という見通しになってしまう。そこで「～に出てみると」、「～へ行ってみると」というように広い意味で用いることを奨励することにした。

風そよぐ
ならの小川の
夕暮れは
みそぎぞ夏の
しるしなりける

こちらの和歌は、上賀茂神社の御手洗川の小景を読んだものである。作者は、藤原家隆。人々が六月祓というみそぎ、つまり川に身を浸して清め、夏の穢れを払う六月三十日の行事を取り上げ、これこそが「夏の証しである」と詠み上げたものである。季節、日時が特定される和歌であるが、中学生に日時を限定した和歌を創作させるのは無理なので、「ザ(the)～である」出来事や風景を詠むように指示した。特に中学校生活の出来事、部活の特徴、行事などを詠むと詠みやすいと助言した。こちらは、山部赤人の和歌の類想歌創作に比べると、いわば着地点を示す方式なので、やや難易度が高いと考えられる。

なお、係助詞「ぞ」が用いられているので、文末は連体形にする必要があるが、そこにはふれず、原歌と同じように作るように指示しただけであった。創作作品については、係り結びの法則がうまく使用できていないものは、こちらで簡単に修正した。

以下、特徴的な作品 35 首(「……ゆうち出でて見れば」型 20 首・「……ぞ○○のしるしなりける」型 15 首)と授業者による寸評を示す。寸評は生徒用に作成したものである。

（3）「……ゆうち出でてみれば」型

①太陽ゆうち出でてみれば周辺の炎に包まれ常に暑けり

太陽系全体を把握し、その想像を絶する暑さを表した作品。スケールの大きさが魅力。

②ハワイの海ゆうち出でてみれば美しき海と夕日に見とれつつ

ハワイってこんな素晴らしいリゾート地なんだろうと思わせてくれる。ハワイ観光局のコピーになりそうな作品。

③アメリカゆうち出でてみればＮＢＡの激しい試合に圧倒される

アメリカのスケールを表す一つの情景としてプロバスケの試合がある。百キロ以上同士の激しいぶつかり合い。

④北海道ゆうち出でてみれば雪景色の青い空の中でスキーすべりつつ

スキーは青空の下の白銀の世界で楽しむもの。まるで青い空から滑り降りてくるような感覚。

⑤オーストラリアゆうちいでて見ればコアラのささにつかまり僕を見つめる

「ささ」ではなく、「ユーカリ」なんだろうけど、「見つめ」合う「コアラ」と「僕」が目に浮かび笑ってしまう。

⑥日御碕ゆうち出でてみれば白波の冬の日本海海は荒れつつ

「日御碕」は「日本海」に突き出ていて、岬そのものが「冬」の「荒」い「白波」に洗われている感覚。

⑦アマゾン川ゆうち出でてみればピラニアの群れに襲われ病院生活

「ピラニアの群れに襲われ」たら「病院生活」ですむの？テレビのバラエティを見るようなユーモア溢れる歌。

⑧嵐山ゆうち出でてみれば紅葉の京都の文化に人はみとれる

秋の「嵐山」の「紅葉」にふれ、「京都の文化」を味わう。観光客になりきった作品。外国・地方の人の宿願。

⑨沖縄ゆうち出でてみれば白浜のきらめく海に星は降りつつ

「海に星は降りつつ」という表現が現代的であり、古典的でもある。「沖縄」で一度見てみたいと思わせる作品。

⑩東京ゆうち出でてみれば友達と都会の景色に目を奪われつつ

「東京」はどこまで行っても「都会の景色」。つい「目を奪われ」てしまう田舎者の「友達」と僕。ユーモアの歌。

⑪香川ゆうち出でてみれば手作りのさぬきうどんを食べ楽しみつつ

「つつ」を巧みに取り入れた作。本場「香川」の「さぬきうどん」は「手作り」。強烈な歯ごたえを楽しむ。

⑫三代目のライブゆうち出でてみれば当日の盛り上がる凄さに喉が潰れる

「ライブ」は聞くだけでなく、参加することに意味あり。「喉」も「潰れる」し腕も痛くなる。それがファン。

⑬北海道ゆうち出でてみれば海鮮のおいしさときたら世界一なり

北の海の産物は京都にはなじみが薄い。「北海道ゆうち出でてみれば」御当地ならではの美味しさは「世界一」。

⑭祖母の家ゆうち出でてみればのら猫がエサを求めて家に寄ってくる

この「のら猫」は「祖母の家」で餌付けされているのだろうか。人と猫の淡くて温かい交感が感じられる歌。

⑮演奏会ゆうち出でてみれば胸がなる私の気持ちをトロンボーンにのせる

「演奏会」には「うち出で」るもの。緊張の中で「気持ち」を整えつつ「トロンボーン」の音に紡ぎ出していく。

⑯甲子園ゆうち出でてみれば黒土の上の勝敗で選手涙する

なぜ泣くのかと思ってしまうほど「甲子園」の敗者は必ず「涙する」。それは経験したものしか分からない世界。

⑰アメリカゆうち出でてみれば音量の大きい音でクラクション鳴る

「大きい」「音量」で「クラクション鳴」らす国が「アメリカ」という意外な発見が三十一文字で表現された。

⑱ブラジルゆうち出でてみれば人々がサッカーしているサッカー王国

国中「人々がサッカーしている」国がブラジル。やってきてみるとまわりすべてサッカーという光景を詠んだ。

⑲学校ゆうち出でてみれば行事の日皆の心に闘志ありつつ

クラス対抗、学年対抗、いろいろの行事があり、それが「皆の心に闘志」を湧かせ、連帯感を生む。

⑳中京区ゆうち出でてみれば友達と家の中にて温かさ増しつつ

「中京区」の「中」は「家の中」、「友だち」の中を連想させる。そこから「温かさ増し」ていくのだ。

最大の特徴は、場所であろう。上の句に、「太陽」という宇宙の場所、「アメリカ」、「オーストラリア」、「ブラジル」などの外国、「ハワイ」、「アマゾン川」などの外国の場所、「北海道」、「東京」、「沖縄」、「香川」などの都道府県、「日御碕」という他県の特定の場所、「嵐山」、「中京区」などの京都の土地、「祖母の家」という親族の家、「甲子園」、「三代目のライブ」、「演奏会」などの大きな行事、「学校」という慣れ親しんだ場所など、さまざまに詠まれている。

また、第二句以下にその土地･場所の特徴を活かして、オリジナルの内容が盛り込まれている。「ＮＢＡ」、「コアラ」、「ピラニア」、「日本海」、「サッカー」などの事物や光景、「さぬきうどん」、「海鮮」という味覚、そして「のら猫」、「トロンボーン」、「行事」という詠者に密着した事物・事象などである。そして、それは中学生らしい心情や感覚でまとめられる傾向にある。「見とれつつ」、「圧倒される」、「見とれる」、「奪われつつ」、「楽しみつつ」、「喉が潰れる」、「世界一なり」、「胸がなる」、「涙する」、「闘志ありつつ」、「温かさ増しつつ」など。

これらの作品を見ると、詠み始めの型を規定する「……ゆうち出でてみれば」型は、その後の展開を容易にしていること、その内容の豊かさを実現していることなどの点で作品の完成、内容の満足度に一定の到達が見られることが認められる。和歌の形式を踏襲するという方式が作品の内容の自由度、豊富さに結びついたといえよう。

(4)「……ぞ○○のしるしなりける」型作品

①暑い夏近くのお祭り増える家族金魚とりぞ夏のしるしなりける

「金魚とり」の情景も思わず立ててしまう声までも届いてくる作品。

②夕暮れどき道の途中の銀杏の木は舞ったときぞ秋のしるしなりける

銀杏の黄金色の葉が夕日を浴びて舞う情景を的確に捉え、感動を巧みに言葉にした作品。

③太陽に照りつけられるグランドはノックダウンぞ夏のしるしなりける

上からの「太陽」だけでなく「照りつけられるグランド」も暑い。その「グランド」に飛んで捕球する姿。暑い。

④猛暑の中音楽室で吹奏楽部はコンクールぞ夏のしるしなりける

「吹奏楽部」は体育会系とも言われる。コンクールめざし体力と表現力の猛特訓が続く夏休みの光景を詠んだ。

⑤向かい風シーズン初めて跳んだのは練習ぞ夏のしるしなりける

陸上競技の練習だろう。「向かい風」の中の「シーズン初」の練習。そこに夏を感じるのはアスリートならでは。

⑥蒸暑い夏の終わりの醍醐味は甲子園ぞ夏のしるしなりける

甲子園球児はよく熱中症にならないものだ。「蒸暑い」晩夏に全力プレー・全力疾走する。「夏のしるし」だ。

⑦田辺中運動場での吹奏楽部はマーチングぞ夏のしるしなりける

大音量と一糸乱れぬ動きが「吹奏楽部」の「マーチング」の命。そのために「運動場」での「夏の」特訓がある。

⑧桜舞う京都の寺の朝ぼらけは静寂ぞ春のしるしなりける

あれだけ人が溢れる京都の寺も「朝ぼらけ」は「桜」だけが「舞」い、「静寂」に満ちる。それも「春のしるし」。

⑨中学生学校で夏に着る白いセーラーぞ夏のしるしなりける

「セーラー」服の「中学生」を「夏」の光景として捉えた。「セーラー」は水兵の意味。夏がとても似合う。

⑩風そよぐ家の窓で鳴る風鈴はきれいな音ぞ夏のしるしなりける

「夏」は暑いという思い込みがある。だが「鳴る風鈴」は涼しい「夏のしるし」。聞いている人の表情も見える。

⑪部屋の中静かな環境美術部は文化祭ぞ秋のしるしなりける

音のない部活もある。「美術部」の風景を巧みに捉えた。皆が「文化祭」へむかって黙々と製作を続けている。

⑫海開き真夏の海の晴れた日は泳ぎぞ夏のしるしなりける

「真夏の海の晴れた日」の「海開き」幸運である。そんな空の下で海へ出て行く「泳ぎ」はまさに「夏のしるし」。

⑬海風ふく太平洋の日の出ごろまぐろぞ男のしるしなりける

「日の出ごろ」の「海風」は涼しいのか。薄闇で巨大な「まぐろ」を釣り上げる。それを「男のしるし」とする。

⑭虫が鳴く我が家の庭のしげみこそ涼しい秋のしるしなりける

「我が家の庭のしげみ」に「虫」の音が聞こえるようになった。それに「涼し」さを感じ、秋の訪れを知る。

⑮桜達優しくつつむ学校は別れぞ出会いのしるしなりける

桜ソングという言葉もある。卒業、入学の時期の「桜」は、「桜達」に「優しくつつ」まれている感じがする。

この形式は、何をもって「……のしるし」とするかがポイントである。「しるし」、つまり証しといえる発見と内容を盛り込む必要がある。作成された作品に出てくる「しるし」と内容の対応は、「金魚とり＝夏」、「ノックダウン＝夏」、「コンクール=夏」、「マーチング=夏」、「静寂＝春」、「白いセーラー＝夏」、「文化祭＝秋」、「まぐろ＝男」、「別れ＝出会い」などであり、かなり工夫し、模作しつつ作歌していることが見て取れる。この型は、和歌としての焦点化が必要なので、内容の整合性、鮮明度が求められる。その分、完成すると和歌の詠い上げの満足感は高いものとなる。「……ゆうち出でてみれば」型よりも一段階高度な作歌方法と考えられ、歌数も「……ゆうち出でてみれば」型の半分程度となった。

4. 百人一首を活用した和歌創作学習の成果

「グループによる返歌創作」を入門段階として設定し、全員創作に成功したことが功を奏し、発展段階の「個人による百人一首の類想歌創作」も全員成功した。こちらも基本型の「……ゆうち出でてみれば」型と発展型の「……ぞ○○のしるしなりける」型の二種類の方法を示し、選択により創作させたことが大きな成果に結びついたと見ることができる。和歌という 1300 年間の伝統は音律として、また内容の適切性として中学生に体感されていたことが見出された。この実践は、この体感を生かし、具体的な和歌として具現化することに到達した試みとなった。課題として、この音律に親しませる年間計画的な実践を実現する方法を開発することであろう。

Ⅲ. 結語

この試行的な実践では、古典教育の問題点の克服に関するいくつかの成果が得られた。古典と学習者を上下関係･垂直構造に位置づけることから脱する方法の提案ができたこと、和歌創作というなじみの薄い学習に全員が高い意欲で取り組めたこと、和歌創作を全員皆作で実現するという結果を出せたこと、和歌の模倣・翻案による創作方法を開発したこと、中学生が古典和歌の形式を踏襲しながら、現代的な内容を案出したことなどである。

今後の課題としては、ここで提案した方法をより合理化、簡略化して汎用性の高い和歌創作学習へとブラッシュアップする必要があること、今回成功した和歌創作学習に継続性を持たせるために計画的な実践方法を案出する必要があることなどがある。これらが実現すればより効果の大きな和歌創作学習が見込まれることになる。

なお、末尾ながら本実践の機会を与えてくださった京田辺市立田辺中学校の坂本出校長、二年生国語科担当の磯貝美智子教諭、杉山瑞葵教諭、同校の諸先生方には多大なご支援をいただいたことに対して、感謝申し上げる。

＜引用文献・参考文献＞

内藤(2009) 内藤一志「古典」『国語科教育実践・研究必携』p143，全国大学国語教育学会編，学芸図書

内藤(2015) 内藤一志「195 伝統的な言語文化」『国語科重要用語事典』p209，髙木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春編著，明治図書

柴田(2013) 柴田昌平「小学校・中学校の和歌教材について―教科書調査・アンケート分析結果より―」『日本言語文化研究』第 18 号，pp47-61，日本言語文化研究会(代表糸井通浩)

柴田(2015) 柴田昌平「生徒が動く和歌学習―段階的に認識を広げる学習の実際―」『国語科教育』第 77 集，pp54-61，全国大学国語教育学会編